



TITLE:

JSSEES創立の経過

AUTHOR(S):

山口, 巖

CITATION:

山口, 巖. JSSEES創立の経過. ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授
停年記念論文集 1998: 796-801

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65765>

RIGHT:

未発表 1990年。

JSSEES 創立の経過（創刊号発行まで）

JSSEESの創立のきっかけは偶然の事から始まった。ロシア語学研究あるいは広くスラヴ研究についての外国の論文を読むことの多かった私は諸外国、特に西欧の研究者が、さまざまな語学あるいは基礎的な分野における系統的な教育を受けていることが窺われるのに対して、日本においては、特にこの分野の研究者がまだ少ないこともあって、専ら独力で基礎的な力をつけることを余儀なくされている現状を考えて、系統的な教育を各分野の研究者が協力して若い学生に与えることが出来るようにしなければ、とかねてより考えていた。このようないわばとりとめのないことをポーランド語を教えておられた京都産業大学の中山昭吉教授や親しい友人の京大の当時助教授であった高橋正立氏と話をしている内に、そのような遠大な構想は当面無理としても、日本の研究が日本語という言語障壁によって外国にあまり知られていない現状を考えれば、ヨーロッパの言語による雑誌を刊行して、日本における研究の現状を知らせるようにすることが先ず必要であろう、そうすれば若い研究者の研究にもよい刺激を与えることが出来るのではないか、と言う話になった。

この話をもう少し煮つめようという中山氏の提案で、1976年の秋のある夕方、京都の四条河原町にあった、阪急電車の駅の近くで三人が集まり、話をした。ここではスラヴ圏を中心とした地域研究の性格を持つ必要、そのような研究を發表できるような欧文の雑誌を出す可能性、将来はスラヴ圏の内部の地域に分かれた分科会が組織できるようにしたいこと、等が話し合われた。この話をきっかけにしてそれぞれが親しい人々に働きかけ、よく1977年3月14日に京大の楽友会館において非公式な相談会が行なわれた。この時参集したのは上記の三人の外に当時立命館大学の助教授であった奥村剋三氏、龍谷大学助教授の大津定美氏、甲南大学の小島修一氏の三人、計六名であった。ここでは高橋氏からこれまでの経緯についての説明があった後、討論が行なわれた。その要点はスラヴ圏の総合的な

研究に資する必要があること、少なくとも当面は雑誌の刊行に重点をおくこと、分野としては文学、言語、芸術の分野、経済、政治の分野、思想、歴史、地理などの分野を考え、それぞれのグループに世話人をおくこと、また雑誌の掲載論文はアカデミックなレベルを保つこと、等の外、会の組織、会の名称などについてであった。ここでスラヴ圏の概念についての討論があり、例えばドイツ語はスラヴ語に属していないが、政治あるいは経済の面ではスラヴ圏と密接な関係があることが指摘された。また外国の研究者にも開放すべきだと言う意見もあったが、会員の会費によって運営されること並びに会の設立の趣旨からして、日本の研究に限るべきであるとの結論になった。このような討論をふまえて会の名称として (Japanese) Society for Slavic and East European Studies (通称 JASSEES)、また会誌の名称として (Japanese) Slavic and East European Studies が候補として挙げられた。Japanese が括弧付きであるのはこれを冠することが英語の名称としておかしくはないかどうかをネイティブに大津氏が確かめるまでの経過措置であった。またその趣旨からして日本語の名称は考えないことにした。

会の組織については研究者が既に多くの個別的な学会に所属していることから、屋上屋を重ねることになっては良くないという意見があり、当面学会とはしないと言うことで合意された。会費については一律にしないで口数にするべきであるという強い意見があり、発起人には原則として二口、一般の人は定価に見合う一口にしようということになった。また徒手空拳で行なうことでもあり、中心になるメンバーはおよそ十口を負担すること、但し会員は口数によるいかなる差別も行なわず、特権も認めないこと、を申し合わせた。

以上の諸点を骨子にして設立準備委員会を発足させて、具体的に会の趣旨に賛同して発起人になってもらうように働きかける人の名を出し、検討することになった。そのために「Japanese Society for Slavic and East European Studies 設立のご案内とお願い」の案文を中山氏が、規約案を山口が作成することになった。

1977年4月4日京大の山口研究室及び4月15日京大楽友会館で行なわれた会合では上述の案文と規約案が討議された。また5月20日の会合では会誌を年間とすることの外、編集権の問題が討議され、編集委員会の内規を作成する必要が指摘

されたが、これについては次回に討論することになった。また会員の種別として、維持会員（10口以上）、賛助会員（二口以上）、会員（一口以上）、法人会員等の区別が決められた。また会計年度をどうするか、事務局をどうするかなどの具体的な問題も、この時討議された。更に発起人総会を5月28日2時から開催することになり、呼掛け文と規約案及び、発起人になることを承諾するかどうか、また発起人総会に出席するかどうかを問い合わせる葉書を発送することを決めた。

このような準備の上で1977年5月28日京都市左京区の京都学生センターで行なわれたJASSEES 設立発起人総会は17名の出席で行なわれた。この会は設立準備委員の奥村剋三氏の司会で始められ、同じく設立準備委員の中山昭吉氏から設立に至る経過と「設立の御案内とお願い」を約140名の方々に発送したこと、総会前日までに返事を寄せられた方が57名、その84%が設立に賛同されたことが、報告された。続いて山口から規約（案）の説明があり、活発な討議の後に若干修正の上可決された。修正の内容の主なもの理事長権限を明記することと会費による会員の種別を4種とすること、会費一口を2000円とすることであつた。

会誌の概要と見積については設立準備委員の大阪大学の藤本和貴夫助教授（当時）から説明が為された。雑誌の体裁などの基本線についてはここで合意が得られたが、財政を確立するために出版助成金等の助成金を得るように努力すること、寄付を仰ぐよう努めること、販売ルートを確立することなどが要望された。

会の役員選出は最終的には設立総会に委ねられるが、おおよその人事計画について山口から報告があり、理事についても内諾を得る作業が続けられている旨報告された。これに関連して発起人総会でも理事及び発起人の候補の推薦があつた。

また設立総会を秋に開催することが提案され、承認された。

7月8日の準備会では総会前の事務的な手続きとして、振替用紙を含む全員に送る文書の印刷、振替口座の開設、寄付の依頼、総会日程などが決定された。総会としては11月23日の勤労感謝の日が予定された。また会長として井桁貞敏氏に依頼をしていたが、難しそうなので、再度同氏に依頼を行なうように決定した。全体に送る文書は10月末から11月初めに送付することとし、中山昭吉氏に案文の作成を依頼して、次回に討議することになった。

これをうけて7月21日に京大山口研究室で行なわれた会合では、「入会と設立総会のご案内」の案文が討議された。その結果を発起人に予め送って意見を聞き、了承を得ることが決められ、案文が作成された。これはその後送付された。この時点で発起人として名を連ねたのは90名、また印刷された後、総会までに新たに発起人に加わったのが9名であった。

9月16日に山口研究室で行なわれた会合では、会長をどうするか、理事をどうするかが論議された。会長は折衝中であるが、理事長として桃山学院大学の竹浪祥一郎教授に依頼することにした。また分野別に理事の候補者の名前を挙げて内諾を得ることをきめ、各自分担した。この時理事会内規と投稿規定が必要であるということになり、作成することになった。

10月21日に山口研究室で行なわれた会合では設立総会の具体的な打ち合わせが行われ、記念講演を竹浪教授に引き受けてもらえることが報告され、決定された。

11月16日の会合では総会の後2月24日に奥村剋三氏を召集者として理事会を行なうことを決めた。また竹浪祥一郎教授が理事長を引き受けてくださる旨の返事があったことが報告された。また規約の14条に事務局の構成を入れること、理事会内規、編集内規、投稿規定の最終的検討が行なわれた。その際、編集委員会は編集事務を行なうだけで内容には立ち入ることが出来ない事が明確にされた。当面事務局は高橋正立氏と山口が担当することになった。

11月18日の会合では、高橋氏より会誌発行及び郵送料の試算が報告された。また井桁氏が会長を断わられたので、竹浪氏に会長になってもらえるよう中山昭吉氏が交渉することになった。

1987年11月23日午後一時から京大楽友会館に於てJASSEESの設立総会が行なわれた。これに先立ち記念講演として竹浪氏の「最近の東欧」という題の講演が行なわれた。議長は奥村剋三氏、書記大津定美氏であった。議事は1) 設立趣旨説明(大阪市立大学左近毅氏)、2) 経過報告(中山昭吉氏)、3) 規約(案)説明(山口巖)、4) 会誌刊行の手続き(中山昭吉氏)、5) 会費及び予算の説明・承認(高橋正立氏)、6) 役員選出、であり、出席者は21名であった。席上本会への

参加要請を約800名の研究者に送り、総会の時点で168名(387口)の参加があったことが報告された。

1) の設立の趣旨に関連してはこの会が「学会」でないことを確認、又日本の西欧研究にみられる偏向を避け、地域研究としての総合の実を挙げるよう努力されたい旨の希望が出された。また高度に専門化された個別研究と総合研究を両立させることは難しいが努力する必要があるとの指摘があった。3) の規約に関しては運営の中心となる理事会の回数、定足数、議長などの規定を追加し、明記すべきであること(理事会の項を修正、第2項追加)、会長、理事長の項を修正、理事長が代表権者であることを明記すること、会の所在地を明記すること、理事会の開催に当たっては予め議題を明らかにし、欠席の場合は委任状を取ること(理事会内規に明記する)、事務局の構成を別途定めること、等が提案され、了承された。

6) の予算に関連しては、1978年度は1979年度に吸収し、1979年度を以て初年度とすることが承認された。

7) 役員については理事、会計、監事の選出を行なった。会長については具体的な推薦があったが、決定にはいたらず、理事長を含めて新しい理事会に一任することになった。

12月16日に行なわれた会合では総会の議事録の説明と検討がおこなわれ、議事録及び規約を印刷し、予算、役員名簿とともに理事に送ることが決定された。また理事会を2月下旬または3月に開催すること、議題は理事会内規、投稿規定、編集内規の決定、理事長、会長の選出、事務局の構成の決定を行なうことが決められた。そのための召集状を2月上旬に出すことも決められた。

この間12月9日付でソ連・東欧学会代表理事の気賀健三氏の名前でJASSEES事務局宛の書簡があり、同学会の英語名が The Japanese Association for Soviet and East European Studies であり、従って略称が JASEES と成って混同される恐れがある旨の申し入れがあった。当会としては Priority を尊重して JSSEES とするようになりたいが、これを決定するのは総会であり、そのためには一年待たなければならないことから、理事会に於てこのことを報告し、総会までは過渡的措置として会員に周知して事実上 JSSEES を用いるようにすることとし、その旨

事務局より返事を行ない、更に理事会に於てこのことが了承された後、再度理事長名で通知を行なった。

第一回理事会は1979年2月24日に楽友会館に於て開催された。理事総数29、出席11、委任状13であった。理事会ではまず総会の議事録が承認された後、理事長として竹浪祥一郎氏が選出された。また理事会内規、編集内規、投稿規定、編集委員会と事務局の構成及び事務局の所在地が決定された。それから創刊号のおおまかな編集方針が決定され、とこれに関連する会員の拡大と財政の問題が論議された。また会長については当面空席にすることになった。

会員に全体の動きを伝えるために News Letter の第1号が1979年3月27日付で発行された。

4月17日に事務局会議が開かれ、理事会の議事録について確認を行なった。

編集委員会は5月19日（第一回）、6月30日（第二回）、9月22日（第三回）、1980年1月19日（第四回）が開かれ、3月29日には京都市左京区の喫茶店東一城において午後二時から第二回理事会が開かれた。ここで第一号の掲載論文が最終的に決定され、また分野別のクロニクルの執筆者が依頼された。会誌第二号の編集方針もここで決定された。理事会では80名の新入会員の承認を行ない、会員総数はこの時点で287名となった。会誌第一号は8月28日に会員宛に発送され、同時に同日付けで News Letter の3号が発行された。

第32回 1990年京都大学十一月祭エスペラント語研究会のパンフレット。

エスペラントと私*

私がエスペラントを学んだのは、高等学校の時であった。そのとき英語の知識から、エスペラントがラテン系の言語であると思った。しかしその後色々な言語

*原文は日本語。エスペラント訳は同研究会部長大信田丈志氏による。なお、第36回十一月祭(1994年)の際にも掲載された。